
愛する気持ちは永遠に...

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する気持ちは永遠に・・・

【Nコード】

N1146B

【作者名】

ちい

【あらすじ】

「留学することにしたんや。」突然の平次からの言葉。何でや？何でなん？そんなん、あたしがめっちゃ寂しいやん。あたしはこんなに平次の事思っとるんに、平次はあたしの事何とも思ってへんのやろうか…。ここから始まった二人のすれ違い。二人はどうなってしまうのでしょうか？

1話：始まり？終わり？（前書き）

初☆平和です。上手く関西弁が書けているか不安です。間違っていたら、是非教えて下さい。
でわ、平次と和葉のお話始まりです。

1話：始まり？終わり？

いつからやろ？あたしがこんなにも平次の事好きになってしもたんは…？

「俺、留学する事にしたんや。」

「え…？」

和葉は耳を疑った。

「何て…言ったん？」

「せやから、留学する事にしたんや！」

「へ、平次が？」

「他に誰がおるっちゅーねん。」

そんな…って事は、あたしの側から平次がおらんなるって事？そんな、そんなん…

「嫌や。」

気付いたら口に出していた。

「嫌や。平次が留学するん。うち、そんな嫌やで！」

最後の方は叫んでいた。

「はぁ？何でお前がそんな事言うねん。」

そこではツと気が付いた。

「な、何でって…ほら、うち平次のお姉さん役やん。せやから、うちやのうて、平次がそんな嫌なんちゃうかなあ思ってた。」

「アホ。そんなんやったら、留学なんかせんわ。」

平次はそう言うと、部屋を出ていってしもうた。

「なんやねん。いっつも勝手に決めて…平次何か平次何か、どこでも行ってしまえばいいねん…。」

あ、あかん。涙、出てきた…。

「何でやねん。何で留学なんかするんや。あたしは、平次がおらん

なる何て、考えられへんのに、平次はあたしの事、何とも思っ
てないんやろか…。」

「…、和葉の奴、怒ったかな。って、何で俺が和葉の事気にせな
あかんねん。これは、俺が決めた事やねん。あいつの事なんか、気に
せんでええはずなんに…。」

ああ、くそッ！と、平次は頭をかいた。

「何でこんなに気になるんやろ？ 訳分からへん。」

1話：始まり？終わり？（後書き）

どうでしたか？前書きにも書いた通り、関西弁の間違いがあったら指摘お願いしますm（　）m話自体の評価もお願いします。でわ、また次回にお会いしましょう。

2話：お互いの決断（和葉ver.）

チャララン

蘭の携帯の着信音になった。

「あ、和葉ちゃんからメールだ。何かしら？」

蘭ちゃんへ

いきなりメール送ってごめんな。ちょっと相談があんねん。聞いてもらってええ？

「和葉ちゃん、どうしたのかしら。また服部君と喧嘩でもしたのかな。とにかく、和葉ちゃんの相談聞いてあげなくちゃ。」

蘭はすぐに返事を送った。

和葉ちゃんへ

もちろん和葉ちゃんの相談に乗るよ。どうしたの？私に出来る事だったら何でもするから、何でも言って。

「送信っと。和葉ちゃん、何があったんだろう？」

チャララン

「蘭ちゃんから返事や。」

和葉は蘭からのメールを読んだ。

「やっぱり蘭ちゃんは優しいなあ。相談させてもらお。」

和葉は蘭にメールを送ろうとしたが、

「やっぱり電話させてもらお。」

プルルル

「もしもし。和葉ちゃん！？蘭だけど。どうしたの？」

「あんな、実はな、平次留学するらしいねん。」

「え！？本当？」

「うん…。さっきいきなり言われてん。あたしそんなん、めっちゃ寂しい、絶対我慢出来へん。」

和葉は話ながら泣いていた。

「和葉ちゃん…。その事、服部君には言ったの？」

「ううん、言ってるへん。あたし、ついいつもの癖で、喧嘩みたいなんかってもうて…。」

「そっか。じゃあ、まずは、服部君にその事言った方がいいよ。いつもみたいにならないように、ね。服部君だって、和葉ちゃんが寂しいって言ったら、色々考えてくれるよ。後、服部君がどうして留学しようとしているのかも、聞いてみたら？」

「…、わかった。あたし、ちゃんと寂しいって平次に言ってみるわ。そんで、何で留学したいんかも聞く。蘭ちゃん、ありがとうな。」

「どういたしまして。頑張ってるね。また何かあったら聞くから。」

「うん。ならまたな。」

「じゃーね。」

2話：お互いの決断（和葉ver.）（後書き）

次回はお互いの決断（平次ver.）です。〇（＾－＾）〇

3話：お互いの決断（平次ver.）（前書き）

和葉ver. に比べて長めです。

3話：お互いの決断（平次ver.）

プルルル

「もしもし。」

「おう。工藤か？俺やで。」

「何だよ。俺今忙しいんだけど。」

コナンは、面倒そうに言った。

「つれない事言うなや。ちよつと相談乗ってもらおうおもただけやんけ。」

「だーかーらー、それが面倒だつてんだよ。」

「まあまあ。」

平次がコナンをなだめる。

「んで？何だ、相談って。」

「実はな、俺、留学する事にしたんや。」

「は！？何で？」

「俺な、探偵になりたいんや。」

「は！？それくらい知ってるよ。っつーか、俺達探偵だろ？」

すると、平次は少し口ごもる。

「そうやけど…。」

「何だよ、はつきり言えよ。」

「工藤、笑いそうやから…。」

いつもの平次らしからぬ発言である。コナンは少し真面目な声になった。

「どうしたんだよ。笑わねえから言えって。」

「俺、ほんまにみんなから信頼されて、尊敬される探偵になりたいんや。世界中をまたにかける探偵になりたいんや。そんでな、そのためには、白馬おるやろ。あいつが留学してる学校行かんといけへんのや。」

「ふーん。」

「…笑わへんのか？」

「笑わねえよ。俺だって、そんな探偵になりたいって思ってるからな。でも、お前、それで俺に何を相談したいんだ？」

「…あいつの事やねん。」

「あいつ…、もしかして和葉ちゃんか？」

「せや。和葉に留学する言うたら、あいつ、嫌や。って言いよるねん。最初は何でそんな事言われなあかんのやろ思っつて、和葉と喧嘩してしもたんやけど、その後妙に和葉の事気になってしもて…。」

「それって要するに、お前が寂しいんじゃないの？」

「は!？」

「お前が和葉ちゃんと離れ離れになるの、寂しいんだろ。」

「そんな事ないわ。あいつなんかおらんくても、俺は別に…!!」

「俺は別に、何だ？」

「…俺は別に、さ、寂しくなんか…あらへん…。」

「本当か？」

「ほ、ほんまや。」

「ふーん。でも、お前はそうだとっても、向こうは寂しいって思ってるんじゃないの？」

「か、和葉が？そんなわけあらへんやろ!？」

「だって、嫌って言ったんだろ？普通どうでもいい奴にんな事言わねえよ。」

「…、せやけど、俺は留学したい。せなあかんのや。」

「わあってるよ。じゃあ、和葉ちゃんに今俺に言った事を言えよ。どうして留学したいのかを。それで、だから、寂しいけど、行かないやなんねーんだ。って、言ってみせろよ。」

「お、俺が和葉に寂しいなんて言えるわけないやん!」

「じゃあ、和葉ちゃんに寂しい思いと誤解をさせたまま留学するんだな。」

「…、誤解って何や!？」

「はあ！？お前寝惚けてんのか？しっかり言わねえと、和葉ちゃん、自分の事何て、何とも思っていないって勘違いするぞ。だから、平気で留学出来るんだって。好きなんだろ？大切なんだろ？和葉ちゃんの事。」

「う…そ、それは…。…、そやで…。」

「な。だから、言えって。」

「わ、わかった。」

「よし。頑張れよ。また何かあったら電話しろよ。相談乗るぜ。」

「あ、ああ。堪忍な、工藤。」

「気にすんなって。じゃあまたな。」

「ああ。ほなまたな。」

3話：お互いの決断（平次ver.）（後書き）

ちいです。読んで下さってありがとうございます。和葉ver.よりも書くの難しかったです（^| ^;）何か、和葉と蘭なら、普通にこういう事相談し合ってると思うけど、平次とコナンとなると、いったいどうなのか？？それが分からず苦勞した作者です（ー〇ー；上手く伝わったか分かりませんが、一生懸命書いたので、今後ともよろしく願いますm（　）m

4話：笑み（前書き）

ごめんなさい。サブタイトル思い付きませんでした…（^^;）

4話…笑み

「ただいまあ。」

「おかえり、コナン君。」

コナンは博士の家から帰ってきた。コナンはたまたま博士の家にいた時に平次から電話がかかってきたのだ。お陰で、蘭達に気兼ねせずに話す事が出来たのだが。そして、電話が終わって探偵事務所に帰ってきた。

「ねえ、蘭姉ちゃん。」

コナンは少し迷ったが蘭に声をかけた。もしかしたら、蘭も和葉から何か聞いているかもしれないと思ったからだ。

「なあに？」

「さつき、平次兄ちゃんから電話があっただけだよ。」

その言葉に蘭が反応する。やはり、何か知っているみたいだ。

「服部君、何か言ってなかった？」

「うん。あのね、平次兄ちゃん、留学するんだって。」

「それだけ？」

「え？」

「和葉ちゃんの事って、何か言ってなかった？」

「もしかして、蘭姉ちゃん、知ってた？平次兄ちゃんが留学する事。」

「うん、実は、私も和葉ちゃんから電話があっただ。和葉ちゃん、服部君がいなくなるの、寂しいって言って、泣いてた。」

「そうなんだ。でも、平次兄ちゃんも似たような事言ってたよ。」

「ほ、本当？」

「うん。でもね、平次兄ちゃん、すごおい探偵になりたいんだって。だから、寂しいけど、留学しないといけないんだって。」

「だったら、和葉ちゃんにその事伝えなくちゃ。」

「あ、大丈夫だと思うよ。平次兄ちゃん、自分で言ってみるってさ

！」

蘭は心からホッとしたような顔をした。

「そっか。良かった。私もね、和葉ちゃんに言ったんだ。寂しいって言わなきゃ。って。どうして留学したいのか聞いた方がいいよ。って言ったら、和葉ちゃんも、頑張って言ってみるって。」

「そうなんだ。じゃあきつともう大丈夫だね、平次兄ちゃんと和葉姉ちゃん！」

「そうね、きつと。今頃、二人で話してるかもね。」
そう言って二人で笑った。

4話：笑み（後書き）

はい！今回のお話は、単なるコナンと蘭の対話でしたあ。どうでも良くて、ごめんなさい――（・・）――

次回は、今回の最後にコナン達が言っていた通り、平次と和葉がお互いの思いをぶつけ合います。（そんなすごいものじゃないへへ；）

でわ、また――

5話：決心（前書き）

短めです。

5話：決心

平次に言わな！あたし、平次がおらんなんて、考えられへんから。和葉は携帯を手にとった。慣れた手付きでボタンを押す。

プルルル

ベルがなり、すぐに相手の声がする。

「何か用か、和葉？」

平次のあまりにもいつも通りの声に多少いらつきを覚えた。しかし、努めて明るい声を出す。

「あんな、平次に聞きたい事があるねん。」

「何や？俺もちょうど和葉に言わなあかん事あったからちょうどええわ。」

和葉はびっくりした。平次があたしに言いたい事？何やろ？

「それやったら、平次先言って。」

「俺は後でええわ。そっちが電話かけてきたんやから、和葉先言いや。」

「なら、言うで。」

和葉は決心した。

「あたし、平次があたしの側からおらんようになるなんて、考えられへん。そんな、寂し過ぎるんや。せやから、ほんとは、本当は、平次に留学なんてしてほしくない。けどな、そんな、あたしのわがままやって気づいてん。やから、なんで、平次が留学したいんか、教えてくれへん？」

和葉は、すぐドキドキしていた。しかし、ちゃんと伝えられてよかったと思った。後は、平次がなんと答えるか…。

「和葉。」

しばらくの沈黙の後、平次が言った。

「今、家に居るんか？」

「…居てるよ。」

和葉は、何でそんなこと聞くんだろうと思いながら答えた。

「今から、和葉ん家行くわ。」

「え！？何でや？」

「和葉の質問に答えるためや。」

「それやったら、今電話で言えばいいやん。」

「…他にも言わなあかんことあるからな。直接、口で言いたいんや。」

「なら、まっとるで。すぐ来てや。」

「おう。まっとれ。」

5話：決心（後書き）

こんにちわ。今回ののは、今までになく自分で気に入ってません。こんなのを投稿してしまつて、申し訳ないです。本当は、もうちょつと長くして、先まで行く予定だったのですが、それだとうまくいかなかったなので、2話に切ったら、こんな事になってしまいました。今日か、遅くとも明日に、続きを投稿します。本当にすみませんでした。でわ、失礼致します。

6話：誓い

5分もしないうちに平次が和葉の家に来て来た。

「和葉、入るで。」

平次は、今日は和葉のお父さんが出かけているのを知っていたため、何のためらいもなく入ってきた。

「部屋に居るから上ってきてや。」

和葉もいつも通りに返事をした。いつもと違う話になるのはわかっていたが。

「で、何や？」

和葉は、平次が部屋に入ってくるとすぐに聞いた。

「そんなにあせるなや。」

「そんなこと言ったって、気になるやん。」

「なら、言うで。」

和葉はごくつつばを飲む。

「俺な、夢があるんや。でっかいでっかい夢がな。」

「何や？」

「俺が、探偵になりたいんは知っとるやろ？」

「当たり前やないか。」

「でな、俺の夢は、やっぱり探偵になることなんや。けどな、ただの探偵になんか、なりとおない。それやったら、どこにでも居るし、俺ももうなつてしもとるから。」

「何や、それ。あんたもう自分が探偵なった気でおるんやんか。」

和葉はつい笑ってしまった。平次は少しむくれて返す。

「自分うるさいわ。こっちはまじめな話しとるっちゅうに。」

「ごめんごめん。続けて？」

「俺は、ほんまにみんなから信頼されて、尊敬される探偵になりたいんや。世界中をまたにける探偵にな。」

和葉はドキッとした。平次の顔が、いつもの、事件を解いた後のキ

ラキラした顔になっていたから。

「それでな、」

平次の声が出て、はっと我に返る。

「皆を幸せにしてやりたい。」

和葉の目から、涙が出てきた。何か、平次が平次じゃなく見えた。

「おい、和葉。何で泣くんや。俺の話は、まだ終わってないで。」

「な、な…んや？」

平次は、大きく息を吸った。

「もうこんなに心配も迷惑もかけて、俺に、こんな事言う資格ないけど、けどな、俺がいつちゃん幸せにしてやりたいんは、…和葉、お前やで。」

……。声が出ない。平次、今、何て…？

「平次、今、何て…？」

「もう一回、言わせるきか？」

平次はちよっとおどけて言ってきた。けど、顔真っ赤やで。さっきまでは、あたしが緊張しっぱなしやったけど、真っ赤な平次を見て、ちよっとからかいたくなってしまった。

「平次、顔、真っ赤やで。」

「な！！そんなことあるわけないやん。」

「あるある。黒おないもん。」

「ばっ！！お前、俺の必死の…」

「必死の、何？」

「必死の、こ、告白を何で、もっとまじめに聞かんのや。」

平次は、ますます顔を赤くしながら言った。和葉もまた顔を赤くする。

「今の、告白やって、思ってたええの？」

「…、ええで。」

「あり、がと。」

和葉の目から、また涙が流れた。

それから、10分くらいたっただろうか。その間、二人は黙ったままだった。そして、最初に口を開いたのは、和葉だった。

「平次。」

「何や？」

「留学しても、頑張つてや。」

平次はびっくりして、目を丸くした。

「留学していいんか？もっと、反対したりしてもええんやで。反対される覚悟やったし。」

「うん、ええんや。平次の夢壊す権利なんて、あたしにないもん。」

それに、あたしの事、幸せにしてくれるんやろ？世界中の誰よりも」

「ああ、約束したる。」

「それやったら、あたし平気や。ずっと、平次の事、待つとるで。」

「おおきに。」

「そのかわり、今ここで、はっきりと誓ってや。」

平次は一瞬キョトンとした顔をした。どうやって誓えばいいのかわからない様子だった。しかし、和葉がこっちを見る顔で気づいたらしく、本日3度目に、顔を赤くした。それから、一瞬の沈黙が流れ…

二人で、誓いのファーストキス

6話：誓い（後書き）

ちよつと無理やり告白まで持って行っちゃいました。こんな簡単でいいの？と思った方、突っ込んで下さい。えっと、これで一応、平次が留学できるようになりましたね。なので、今回は平次が旅立つところまで行くか、その準備段階か…またいきなり変更してしまうかもしれないのでわかりません。

でわ、次回もよろしくお願いします。

7話：気持ち（前書き）

投稿遅くなってすみません。待たせた割りにたいした物じゃありません汗汗あまり期待せずに読んで下さい。

7話：気持ち

「平次、入るで。」

和葉は平次の家にやって来た。

「ちゃんと準備してるん？」

明日はいよいよ平次の留学の日。この間、いろいろな手続きをしたり、語学教室に通ったり（英語万能の平次にはあまり必要なかったが）と、忙しい日々を送っていた。

「やってるわ。もう英語もバッチシやで。何なら今から英語にしようか？」

「ええで。あたしがチェックしたるわ。」

こんな、他愛のない話をして二人で笑う。

あの日、二人は平次が留学から帰ってくるまで、今までどおりの関係を保つことに決めた。それから、お互いに気づかないほど少しずつではあるが、素直に、優しくなっていた。

「明日やな。」

突然、和葉がぽつりと言った。

「…、せやな。」

平次も返す。すると、和葉は笑顔になって言った。

「頑張ってるきいや。」

平次は、和葉がこの言葉を無理して言っているとわかっていたが、こう答えた。

「おう。任しとき！」

それから和葉は続けた。

「ちゃんと元気にしとるんよ。ご飯とかも食べなあかんよ。事件事件ゆうて、無理しすぎたらあかん。忙しいかも知れへんけど、たまには連絡しいや。それから、…」

「和葉。」

平次はたまらず呼びかけた。

「無理すんなや。」

「…。」

「明日は俺、行くさかい、今日は何でも言ってや。今思てる事、全部言ってや。」

ほんのしばらくすると、和葉は嗚咽を漏らした。

「う…うう、ひっく、ひっく。」

平次はびっくりした。まさか泣くとは思ってなかったようだ。

「和葉。」

平次はもう一度呼びかけた。

「大丈夫か？」

「うう…平次。」

和葉は、平次の名前を呼び、平次に手を伸ばしてきた。平次はすぐにその手を握る。

「平次…寂しい…。」

和葉はついに自分の気持ちに洩らした。

「寂しい。」

和葉は平次の手を握る力を強くしながら繰り返した。平次はそんな和葉をこの上なくいとおしく思った。そして、和葉の手を強く握り返す。和葉はまだすすり泣いている。平次は、和葉を安心させるように、和葉の頭をポンポンと優しくなでた。和葉は少し安心したような顔をして、しばらく泣き続けた。

「落ち着いたか？」

しばらくしてから平次が聞いた。

「うん。大丈夫。ごめんな。」

「和葉が気にすることは何もあらへんて。」

「ありがとう。」

「せや、和葉、ちよつと出かけんか？」

平次の唐突な発言に和葉はものすごくびっくりした。

「え、あたしはええけど…。平次はええの？明日出発やから、今日はあんま出かけんほうがええんとちゃうの？」

「平気やって。今日で大阪ともしばらくお別れやから、見物行つたつて誰も文句言わへんて。」

こう言つて、平時と和葉は出かけることにした。

この後、二人のロマンチックな夜がやってくる…

7話：気持ち（後書き）

こんにちわ。前書きにも書きましたが投稿遅くなりました。私的な事情により、次からも遅くなるかもしれません。こんな私をどうか最後まで見守ってください（ペコ

次話は平次と和葉はある場所に出かけます。上手にロマンチックに伝えられるようがんばります。評価&mp;感想お待ちしております。す。

8話..もう大丈夫(前書き)

うーん、何度読んでも駄作…(ー〇ー)；

8話..もう大丈夫

「なあ、どこ行くん？」

和葉はバイクに乗って、平次の背中につかまりながら聞いた。

「すぐそこや。」

平次はそう答えただけだった。

さて、平次と和葉がやって来たのは、休みの日によく二人で買い物に来るデパートだった。

「どうしたん、平次？何か買い忘れた物でもあったん？」

和葉は不思議に思っただけ聞いた。

「そんなんやない。」

「じゃあ何なん？」

「いや、ちょ、ちょっと和葉と出かけよう思っただけや。」

「？何やの、それ？」

「何でもええやないか。とにかく入るで。」

「う、うん。」

和葉は、平次に言われるままについて行った。

「和葉。」

平次が呼んだ。

「何？」

「何か、欲しいもんあるか？」

「え！？」

「何かあるんやったら俺が買ったるわ。」

「え、どうしたん、急に。」

「何でもええやないか。あるんか、ないんか？」

「せやなゝゝ。」

和葉は考えた。急に言われても思いつけなかったのだ。

「そんなん急に言われても思いつかれへんわ。そやから、あっちの

喫茶店入らへん？もちろん平次のおごりやで。」

「そんなかい。まあええわ。ほないくで。」

平次と和葉は喫茶店に入った。

平次はコーヒーを和葉はコーヒーとケーキを注文した。二人は会話をしながら楽しい時間をすごした。

「平次、ごめん、あたしトイレ行って来るわ。ちょっとここで待っててや。」

「おう、はよお行って来いや。」

和葉はトイレへ向かった。

「さて、と。」

平次はどこかへ向かって歩き出した。

「平次、お待ちせ。」

「お、来たか。」

「この後どうするん？もう帰る？」

和葉は聞いてみた。

「俺が行きたいところ行く。」

「何や、まだ行きたいところあったんや。」

「ここやないけどな。」

そう言って平次はまた歩き出す。

「ちょ、待ってや、平次。」

和葉もあわてて追いかける。

平次と和葉はまたバイクに乗っていた。もっとも、和葉はまたもやどこに行くのかを知らなかったのだが。

「着いたで。」

平次が言った。

「ここ…。」

いつか和葉がきれいだったと言った紅葉がある場所。

どうして平次はここに來たのだろうか？

「平次？ここ…何で…？」

「和葉、また行きたいゆうとったやろ。」

平次は無愛想を装って言った。

「お、覚えとったん！？」

平次が！？あの、すぐに約束忘れて、いつもすっぱかす平次が！？

「当たり前やろ。」

平次は言った。

「忘れるわけないやん。」

和葉は信じられなかった。でも、

「ありがとう、平次。めっちゃ嬉しいで。」

「和葉、ごめんな。勝手に決めてしもうて。」

平次は言った。

「ええんや。前にも言ったやろ。平次は何も悪うない。あたしは平気やで。もちろん、寂しいで。けどな、あたし、ずっと平次の事、好きでいられるねん。せやから、平気なんや。」

和葉は笑顔で言った。その瞬間和葉は何かに体を引っ張られた。

「え！？」

そう、和葉は平次の胸の中にいた。

「へ、平次？」

平次は和葉を抱きしめた。

「和葉、俺も、ずっと和葉の事好きでおる。せやから、まっとうてや。いっぱい待たせてしまうけど、まっとうてや。」

「うん。分かってる。ずっとまっとうで。」

和葉は目に涙を溜めて言った。

それからしばらく、二人はその紅の木がたくさん立ち並ぶ道を手を繋いで歩いていた。

「そや。」

平次が突然言った。

「何？」

「これと和葉に渡そう思ってたんやった。」

そう言っただけ平次は和葉に小さな箱を渡した。

「何、これ？開けてええの？」

「ああ、ええで。」

和葉は箱を開けてみた。

「え、うそ！？」

それは、指輪だった。

「それ、貸してみ。はめたるわ。」

平次が言った。

「ちょ、ちょっと待って。」

和葉はそう言っただけ、靴の中から小さな箱を取り出した。その包みを開けて、平次に見せる。

「今日、平次にこれ渡そう思ってたんや。」

平次が和葉に渡したのと同じ指輪。唯一違うのは、平次のは飾りがピンクで、和葉のは飾りが青である事だ。

「え！？？」

今度は平次が驚く番だった。

「：何や。指輪交換かいな。」

「結婚式みたいやな。」

和葉が言っただけ、お互い顔を見合わせる。

和葉が言った。

「服部平次は嬉しい時も、辛い時も、遠山和葉と共に生きる事を誓いますか？」

「誓います。」

平次が言った。そして、

「遠山和葉は嬉しい時も、辛い時も、服部平次と共に生きる事を誓いますか？」

「誓います。」

平次が和葉の手をとり、指輪をはめる。和葉もそれにならう。

「愛しとるで、和葉。」

「あたしも。愛しとるで、平次。」

二人の目にもう迷いはなかった。

明日はいよいよ平次の旅立ちの日だ。

8話..もう大丈夫（後書き）

こんにちは（へーへ）／今回は平次が留学する前の、最後の二人の時間でした。上手く書けなくて苦勞しました（へーへ；）はい、すみません。

あの、皆さんは和葉がトイレに行った時、平次が「さて、と。」と言ってどこに行ったか分かりますよね？その間に指輪を買ったのです。準備の良い和葉ちゃんの前もって。平次はギリギリに買った。という訳です。

次回は旅立ちです。乞うご期待！（嘘です笑）

9話：旅立ち（前書き）

期末考査だったため、投稿が大変遅くなりました。申し訳ありません。それにくわえて、続きが煮つまり気味なので、おかしい部分があるかもしれません。

9話：旅立ち

今日は平次の旅立ちの日。和葉は早くに目を覚ました。

「平次、何してるやろか？」

そんな事を考えたりしながらいるとあつという間に8時になった。平次の乗る飛行機は11時30分発。そろそろ準備をしなくては。和葉は自分の身支度を済ませて、父親の朝食を作ろうと台所に立った。和葉の父は今日どうしても抜けられない仕事があつて平次の見送りに行けないのだ。もちろん、とても残念がっていたが…。

和葉は、朝食を作りながらやはり平次のことを考えていた。

まあ、平次ならイギリス（あっち）行っても、何も心配ないやろな。英語ばっちりやし、その他も頭ええ。体も丈夫やから病気とかもならへんやろしな。

こんな事考えていたのがいけなかったのだ。和葉はうっかり魚を焦がしてしまった。

「あ、あかん、焼きすぎてしもた。」

そこに父が入ってきた。

「おはよう、和葉。」

「あ、おはよう。お父ちゃん、魚、焦がしてしもてん。ごめんな。ほんとはやりなおしたいねんけど…。」

時計を見るともう9時を過ぎていた。今日はコナンと蘭も見送りに来てくれる事になっている。和葉は平次の家の車に乗って、一度駅まで蘭たちを迎えに行ってから空港まで行かないといけないのだ。

「今からやったら間にあわへん…。ごめんな、お父ちゃん。」

「気にせんでええわ。はよ行つてき。平次君の見送りやろ？」

「…うん!!」

和葉は出て行った。

和葉が平次の家の前に行くと、もう車が出ていて、和葉が来るのを待っていた。

「遅うなってごめんな〜!!」

和葉はそう言って駆け込んだ。

「遅いわ。もし万が一乗り遅れたらどうするんじゃポケエ!!」

平次に怒鳴られた。何か、いつもどおりに接してくれるのがものすごくうれしい。せやから、あたしもいつも通りに接することに決めた。

「そんなこと言ったって仕方ないやん。お父ちゃんの朝ごはん作ってたねんから。」

それから、平次んとこのおじちゃんとおばちゃんに笑顔であやまる。

「おじちゃん、おばちゃん、ほんまに堪忍な。あたしのせいで出発するん遅れてしもて。」

案の定、おばちゃんがこう言った。

「和葉ちゃんが謝る事ないんよ。第一遅れるわけあらへんのやから。平次の言うことなんか気にせんとき。」

おじちゃんは、いつものように黙ってこの会話を聞いている。

いつも通りだ。

和葉は思った。いつも通りの会話ができる事が、今日は物凄く嬉しかった。

そうこうしているうちに、駅に着いた。蘭達とは予め待ち合わせ場所を決めておいたので、簡単に会う事ができた。

「おはよう、和葉ちゃん、服部君。おはようございます、おじさん、おばさん。」

「おはようございます。」

そう言って、蘭とコナンは車に乗ってきた。

「おはよう、蘭ちゃん、コナン君。」

「よお、姉ちゃんと、くど、やのうて眼鏡のボウズ。」

平次のこの言葉でコナンが平次を睨んだのは、言うまでもない。

「わざわざ迎えに来てもらっちゃってすみません。」

「お礼何か言う事あらへんのよ。こんな馬鹿平次何かの見送り来てくれるだけで有難いんやから。」

蘭と静華は、会話していた。その間に車は発進して、空港へ向かう。30分もしないうちに車は空港に着いた。

「着いたで。」

平蔵が言った。

「さあさ、みんな降りて。和葉ちゃん、蘭ちゃん、悪いけど、荷物少し持ってもらえる？」

「ええで。」

「ええ、もちろん。」

「ほら、平次、あんたも荷物持ち！みんな手伝ってくれるんやから。」

「分かつとるわ。」

みんなでわいわい言いながら歩き出した。

「あんま時間ないで。ちよっと急ぎい。」

平蔵が言った。本当にあまり時間がなかった。みんなで急いで歩いた。

荷物は、もう預けた。後は、平次が飛行機に乗るだけ。それだけや。

「平次、そろそろ行き。」

「じゃあ、俺、行くわ。」

平次が言った。

「ちゃんと元気にしとるんよ。」

おぼちゃんの少し心配そうな声。

「事件事件言うとるんやないで。」

おじちゃんのぶっきらぼうな声。

「頑張ってきてね。応援してるから。」

蘭ちゃんの優しい声。

「…、たまには連絡してね。平次兄ちゃん。」

コナン君の少し寂しそうな声。

あ、平次、ほんまにもう行くんやな。

和葉の頬を涙が伝った。

「和葉。」

気づくと、平次が目の前に立っていた。

「行って来るな。」

和葉は黙っていた。すると、平次はいきなり和葉の着ていた上着の紐を引っ張った。当然和葉は引き寄せられる。平次はそのまま和葉を抱きしめた。

「行って来るな。」

平次はもう一度言った。和葉の目には涙があふれた。

「うん。」

「元気にしとりや。」

「うん。平次もな。」

「連絡しいや。」

「うん。返事送ってな。」

「当たり前や。…、ほな、行って来るな。」

「うん。いってらっしゃい。」

和葉は笑顔を作った。

和葉達は、どんどん小さくなっていく飛行機を見ていた。
平次、あたし、待つとるで。…、待つとるからな。

9話：旅立ち（後書き）

感想＆評価お待ちしております。

10話：和葉（前書き）

平次ではありません。ほぼ和葉と蘭の会話です。

10話：和葉

平次が旅立ってから、1ヶ月がたった。あたしは、学校への登下校など平次がいなくなったけど、そのほかには何も変わっていない。友達は、あたしがこんなに普通でおることにびっくりしとった。あたしらって、そんなに仲良く見えてたんやろか……。もちろん、あたしかて、本当は寂しいで。けどな、ほら、あたし、平次と約束してるやろ。せやから、寂しくても平気なんや。あたしには平次がおるから。

平次がいなくなっても、あたしはよく蘭ちゃんのところ遊びに東京へ行った。

「こんにちは。」

「和葉ちゃん！いらっしやい。」

「いらっしやい、和葉姉ちゃん。」

「こんにちは、蘭ちゃん、コナン君。何べんもお邪魔してごめんなあ。」

「全然気にしないで。私だって和葉ちゃんと会うの楽しみにしてるんだから。」

「そうだよ。全然平気だよ。うるさい平次兄ちゃんもいないしね！コナンがわざとらしく言う。」

「あはは。せやな。」

和葉もこういう冗談を笑って返せる。

「あ、もうこんな時間。今からご飯作るから、ちょっと待ってて。」

「あ、あたしも手伝うで。」

「だめよ。和葉ちゃんはお客様なもの。」

「何言ってるん。あたしがお邪魔してるんやもん。手伝うで。」

「そう？じゃあ、お願いしようかな。」

そう言って、蘭と和葉は台所へ向かった。

しばらくすると、いつもより少し気合の入った料理が次々出てくる。

「お、今日はちよつと豪勢だなあ。」

匂いにつられてやって来た小五郎が言った。

「当たり前でしょ。今日は和葉ちゃんが来たんだから。」

「そんなんだったら、毎日来てくれてもいいんだぞ、和葉ちゃん。」
既に何本かビールを飲み、機嫌の良い小五郎は言った。

「もう、お父さんったら！」

蘭はあきれた様に言う。

「あ、そういえば、蘭ちゃん。蘭ちゃんて、高校卒業したらどうするつもりなん？」

「私？私は大学に行くつもりよ。」

「どこのとかって事、もう決めとる？」

「私実は、考古学を学ぼうと思ってるの。だから、都内で考古学が有名な学校に行こうと思ってるよ。和葉ちゃんは？」

「実はな、あたしも東京来ようか思てんねん。あたしは国際学を学ぼう思てんねん。」

「国際学？やっぱ和葉ちゃんも留学するの？実はそうかなあ。っ
て思てたんだ。」

「あ、ううん、ちゃうねん。あたしは留学せえへんよ。日本で勉強
するで。」

「え！？私、てっきり和葉ちゃんは、大学に行ったら、服部君のい
るところに留学すると思てたのに。」

「あたしもな、最初はそうしようと思とったんよ。けどな、そん
なんやったら、せつかく決心したん意味なくなってしまうとおもっ
たから、せやからあたしは日本で平次が帰ってくるの待てんねん。」

「そうなんだ。」

「それにな。」

和葉は少し恥ずかしそうに付け足す。

「平次の留学期間あたしが大学の2年生になるまでなんよ。それだな、終わったら、あたしが行こうと思っとる大学にな、編入してくるつもりらしいねん。」

「あ、なるほど。それで和葉ちゃんこっち東京の大学に来ようとしてるのね。」

「う、うん。多分、学科は違うと思うんやけどな。」

「そっか。あ、じゃあ、大学に入ったら、私和葉ちゃんともっといっぱい遊べるわね。きつと。楽しみだなあ。」

「せやな！ちゃんと大学は入れるように勉強せな！」

「頑張ろうね。お互いに。」

「うん！！」

10話：和葉（後書き）

読んで気づかれたかもしれませんが、ネタ切れ中です…。すみませんが、当初から大まかな骨組み&各話のあらすじはできていたんですが、少しずつできてしまっています…。次回は、この話の平次ver. って感じのものを書きます。それでは。

11話：平次（前書き）

遅くなってしまうってすみません。そしてとても短いです…。

11話：平次

今日はまた1個新しい事習ったで。お前は何してたんや？

ピッ

平次は携帯の送信ボタンを押した。

こっちに来てから、夜寝る前に和葉にメールで今日あった事を送る事が日課になっていた。別に約束した訳ではない。最初の頃は、和葉が送って着ていた。しかし、恐らく和葉の性格上、いつも自分からばかり送っている、平次に迷惑がかかると思ったのだろう。段々と、そういったメールを送ってくる回数が減っていった。

そこで、平次は自分から和葉にメールを送る事にしたのだ。ちなみに平次と和葉は2人とも、いつでもメールが出来るように、グローバル対応の携帯を買っていた。

ピリリリリ

いつものように、すぐに返事がきた。多分、平次はいつも同じくらいの時間にメールを送っていたため、和葉は今か今かと待ち構えていたのだろう。

平次はそう思い、1人静かに笑って携帯を開いた。

今日はちよつとメール遅かったな（笑）平次今日も新しい事習えたんや。良かったな！！

そっちの生活楽しいんやろ？？

休みになったら、帰って来てな。あ、でも、やっぱりあたしが平次のところ行こか？？あたしも外国行ってみたいしな。

ほなまた明日な。おやすみ。

それだけだ。毎日、これ以上のやりとりをすり事はなかった。しかし、平次の心は充分満たされていた。

きつと和葉かて同じはずや。

平次はそう思っている。そして、それはもちろん当たっているのだ。平次はそのままベッドに入った。眠りにつくまでの間、平次は和葉の事を考える。

和葉に会いたい。

そういう気持ちはもちろんあった。だからこそ考えるのだ。しかし、不思議と、不安な気持ちや寂しい気持ちはなかった。それよりも、自分の留学が終わった時、自分が行く大学に和葉がいるという事が嬉しかった。

和葉、頑張って勉強しいや。俺も頑張るで。絶対に同じ学校行こうな。

平次は眠りについた。

11話：平次（後書き）

こんにちは。遅くなってしまってすみません。

一応予告した通り、平次 side です。最初、全部平次の1人語りにしようかと思ったのですが、私的に平次はそんな事しない気がしたので、所々にしました。あまり、文章を発展させられなかったのが心残です…。

今度はいつになるか、ちょっと検討が付きませんが、また次回お会いしましょう。

12話：帰国予定（前書き）

物語が私が思っていたのとは違う方向に走り出しました汗汗

12話：帰国予定

プルルル

電話がなった。

「もしもし。」

「あ、工藤か？俺やけど。」

「服部か。なんだよ。」

「俺、後1ヶ月したら帰るで。」

「え！？もうそんな時期か？」

「ああ。ちよつとだけ早いけどな。」

「ふうん。んで？俺に何か言いたい事あるんじゃないの？」

「あ！さっすが工藤や。当たり前、当たり前。」

「わあったから早く言えよ。」

「あ、このこと、和葉にはだまっというてもらえんか？」

「いいけど…。何だよ。」

「いや、ちよつと驚かせてやろうと思ってな。」

「ああ。そういうことなら分かったよ。」

「頼むわ。」

「ああ、任せとけて。じゃあ、またな。」

「おおきに。またな。」

コナンは、平次との電話を切った後、少し考えてから、下へ行った。

「蘭姉ちゃん。」

「なあに、コナン君？」

「あのね、平次兄ちゃん、もうすぐ帰ってくるって、さっき連絡あったよ。」

「本当？でも、変ね。和葉ちゃんからなにもきいてないわ。服部君

が帰ってくるんだったら、和葉ちゃん、すぐにでも連絡してきそうなの。」

「何かね、予定より、ちょっとだけ早くなっただけ早かったって言ってたよ。あと、和葉姉ちゃんを驚かせたいから、秘密にしてるんだって。」

「へえ。じゃあ、私も和葉ちゃんに言わないようにしないとね。」

「うん。僕も気をつけるね。」

「そうしよう。……。」

「蘭姉ちゃん、どうかした？」

「ねえ、コナン君。こんなのしない？」

こしよこしよこしよ

「あ、いいね。平次兄ちゃんとか後友達にも言って、やってみようよ。蘭姉ちゃん!!」

蘭がコナンに言ったこと。

それは、平次が帰ってくる日に、和葉に内緒で、平次の「おかえりなさいパーティー」をすることだった。

12話：帰国予定（後書き）

読んで下さってありがとうございました。

この後いっただいどうなるんでしょうね？一応考えてはあります
が、前書きにも書いたとおり、この12話で、物語は思っていない方
向へと動きだしたのです。今の所おそらく、後2〜3話で終了する
予定となっていますが、あまり信用しないで下さい。なぜなら、当
初12話で完結するはずだったからです。予定よりなくなってい
ました。

ま、まあ頑張るので引き続きよろしくお願い致します。
でわ、また。

13話：ショッピングの日（前書き）

遅くなって申し訳ありません！！
学年末考査があったもので…汗汗

13話：ショッピングの日

「蘭ちゃん、園子ちゃん!!」

和葉が走って来た。

「ハア、おはよう。」

「おはよう。和葉ちゃん。大丈夫?こんなに急いできて。」

「おはよー。相変わらず毎朝元気ねえ。」

「蘭ちゃんと園子ちゃんもういてるの見えたから。走ってきてしもてん。」

「和葉ちゃんらしいわね。」

今3人は同じ大学に通っている。蘭と和葉はあれこれ話し合ったくせに、結局はおなじところへ行くことになった。そして、園子は当然のごとく、蘭と一緒に来た。

蘭を通じてとはいえ、和葉と園子はこれまでに2、3度会ったことがあっただけだったが、お互いの性格の関係だろうか。すぐに仲良くなり、今ではいつでも3人でいっしょにいるようになった。

「今日どこ行くんやったつけ?」

「午前中に、映画見て、その後少し買い物行こ!!それで、午後は私新一の家の掃除に行かないといけないのよ。あいつから電話あつてさ。園子も手伝ってくれるんだけど...。」

「それやったらあたしも手伝うで!!」

「本当?そうしてくれたら嬉しい!!お願いしてもいい?」

「あつたりまえやん。」

「ありがとう、和葉ちゃん。」

3人は、わいわい言いながら、歩き出した。

実は、平次が帰ってくるのは今日なのだ。

あれから、みんなでいろいろ相談して、新一の家でやることになった。もちろん、この話し合いに参加していたコナンはこのことを知っていたが、蘭からの電話で「新一の家使ってもいい?」と聞かれ、「ああ、いいぜ。」と答えていた。そして、その時、「この日くらい帰って来れない?」とも聞かれ、「…悪いな。」とも答えていた。また、蘭に辛い思いをさせてしまったと思いながら…。

だから、今日の事は、全て作戦なのである。

「結構面白かったね。この映画。」

「そーお? 出だしは良かったけど、最後は何かありきたりーって感じ。あたしはもつと、こう、あつーい大恋愛をしてほしかったのに。」

「でも、主人公と恋人が出会う場面は感動しいひんかった?」

「あ、あれ良かったわよね。」

「あれはOKね。まあ、園子様の大恋愛には負けるけどね。」

「もう、園子ったら。」

あはは。と3人で笑う。

「じゃあこれからデパート行こー!!」

「そやね。おなかもすいてきたし。」

「行こ行こー!!」

3人はデパートの中のカフェにいた。

「ここの店めっちゃおいしいから好きやねん。」

「そうなんだ。良かった!!」

「あ、私これにしよう。蘭と和葉ちゃんは?」

「じゃあ、私はこれ。」

「そしたら、これにするわー。」

「うーん、やっぱりおいしい。」

「ここに入って正解だったね。おいしいって評判だったし。」

「ほんまや。」

「食べたら買い物しよ。新一の家にも行かなきゃいけないから、ちよつと急がないと。」

「うん、分かった。なら、そろそろ行こか。」

3人は、「急がないと。」と、言いながら、たつぷりと買い物を楽しんだ。

「結構いっぱい買っちゃったねー。」

「うん。でも楽しかったわ。」

「ホントホント!!」

「じゃあ、行こっか。」

3人は歩いていった。

「でも、工藤君の家って広いよなー。蘭ちゃんいつも1人で掃除するんだ変やない？ 蘭ちゃん偉いなあ。あたしやったらそんなやつ待っとなれへんわ。」

「そんな事ないわよ。いつも園子やコナン君が手伝ってくれるし。」

それに、和葉ちゃんだって、ずっと服部君の事待ってるじゃない。」

「そ、そんなんあらへん。だって、あたしは別に平次の家掃除とかせんでええし…。」

「そんなのって、あんまり関係ないのよ。和葉ちゃんだって、そんな事思わないわよ。きつと。」

「そうそう、私だつてずっと真さんの事待ってるんだから。あなた達と違って、幼馴染でもないのに。」

「そっか。園子ちゃんも大変なんや。京極さんて空手強いんやろ。あたしも会ってみたいわ。」

「あ、もう着いたわ。」

喋りながら、いつの間にか新一の家に着いていたらしい。蘭はあらかじめ持っていた鍵で、玄関の鍵を開け、取っ手を持って、ドアを開いた。

13話：ショッピングの日（後書き）

続き…、何となく読めてしまいますよね…。

すみません汗汗

私の文章& a m p, 表現力のなさがバレバレですね。。。

ちよっとクライマックスに持って行こうと飛ばしすぎたような気がします。

クライマックスは、もっと盛り上げたいと思います！！

ダメな点、どんどんご指摘下さい。

14話：おかえり（前書き）

こんにちわ。

まあ、おそらく皆様のご想像通りの展開かと…。

と、とりあえず読んでみてください♪♪ワラ

14話..おかえり

パンパンパンパーン!!!!!!

クラッカーが鳴り響いた。

ドアを開けて家の中に入った一同はびっくりして思わず目をつぶった。

でも、本当に驚いているのは一人だけ。

「きゃっ!! え!?! 何なん? これ!?!」

叫んでいるのは、もちろん和葉。

蘭と園子は既ににっこり笑っている。

「和葉ちゃん。目を開けて。」

蘭が言った。

「そ、そやかて、何かが…。」

「大丈夫だって。ほら、早く!!」

園子も言う。

「う、うん。」

和葉が恐る恐る目を開いた。そこには…。

「え…。」

和葉は言葉が出なかった。

「…、工藤君の家掃除来たんちゃうの?」

「ごめんね、騙しちゃって。でも、今日は掃除に来たんじゃないのよ。」

「じゃ、じゃあ、誰か誕生日なん?? 何のお祝い??」

「うん、ちよつとね。和葉ちゃんのお祝いよ。」

「そやかて、あたし別に祝ってもらうような事ないで…?」

「なーに言ってるのよ!! そのためにみんな集まってくれたんだか

ら。」

「そうそう。じゃあ、和葉ちゃんその椅子に座ってね。私達、今からケーキとか飲み物もってくるから。」

「う、うん。」

和葉は、今は何も教えてくれないと悟って、おとなしく座った。

「じゃあみんな、運ぶものたくさんあって私と園子だけじゃ持ちきれないから、手伝ってくれる？」

「はい！！」

そこにいた人達は、みんな蘭に従った。

そこにいた人達とは、コナン、哀、博士、歩美、光彦、元太である。

「そ、そんなにたくさん必要なん！？それやったら、子供達行かせんでも、あたしが行くで。」

「だーめ。和葉ちゃんは、今日の主役なんだから！！さあ、みんな行くわよ。」

そう言って、和葉は、半ば強制的に座らせられ、みんなは出て行った。

和葉は、本当に意味が分からなかった。

「だって、今日はあたしの誕生日やあらへんし、別に何かに合格した訳でもあらへん。ましてやクリスマスでもお正月でもないんに、本当、なんなんや……？？」

トントン

ドアをノックする音がした。

「蘭ちゃん達かな。手え塞がってドア開けられへんのやろか？」

和葉はそう思って、ドアを開けた。

「……………」

ボタン

和葉はドアを閉めた。

胸がドキドキする。顔が赤くなる。

―あたし、熱でもあるんやろか。蘭ちゃん達は何か分からんバーテ
ィーしようとしてるし。もしかしたら、全部夢なんやろか。でも、
でも、夢何やったら、そうなんやったら、ここであんなに、夢の中
くらい、会ってもええよね…。

和葉はもう一度ドアを開けた。

そこには、やっぱり…。

「平次。」

会いたかった人。会えなかった人。大好きな人。愛している人。誓
った人。この世にたった一人の大切な人。

「夢…なん？」

和葉は手を伸ばした。

触れたい。心からそう思った。

夢ならば、どうかもうしばらく、消えんといて、平次…!!

和葉の中にあっただ思いが一気に溢れ出した。

「平次い!!」

和葉は一気に平次の胸へ飛び込んだ。

平次の感触が和葉へ伝わってきた。

―間違いない、これは平次や。夢や、ないん？ほんまに、ほんまに
平次なん…？

そうや、あたしが平次を間違えるはずないんや。平次…、なんやな。

「平次、なんやね。」

「あたりまえやん。」

平次が初めて言葉を発した。

「ほんまに、平次なんや。」

「平次、平次い。」

和葉は平次の胸に埋もれて泣いている。平次も、そんな和葉を優しく抱いているだけ。

穏やかな、時間だった。

「和葉、顔上げえや。」

しばらくして平次が言った。和葉がそれに従う。

「せっかく帰って来たんやで。おかえりなさいくらい言えへんのか。」

「え！？あ、お、おかえり…なさい、平次。」

「帰って来たで。元気にしとったか？和葉。」

二人は見つめ合った。

先に動いたのは、平次。

すぐに二人の唇が触れ合う。

やがて、唇が離れた。と、同時に平次の腕が和葉を優しく、しかし強く、包み込む。

「和葉、会いたかったで。寂しかった。和葉、愛しとる。」

「あたしも。大好きや。ずっとずっと、大好きや。めっちゃ寂しかった。どれだけ連絡取っても、足りへんかった。会いたかったんや。平次に、会って、触れたかった。もう、離れたくない。」

「あたりまえや。離れるわけ、あらへんで。ずっとずっと一緒や。」

もちろん、これは、蘭達が仕組んだお話。

それでも、二人にとってはとても偶然で、とても幸せな時間だった。

14話：おかえり（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。

いやー、平次、帰ってきましたね。平次はかっこいいですね。もう、平次大好き。和葉じゃなくてあたしになってー！って感じの、おバカな作者、ちいでございます。

悩んだ挙句、結局こんな展開汗汗力不足を痛感致します。でも、自分的に、平次はそこそこかっこよく書けたかな…？という感じです。皆様はどう感じられたでしょうか？

まあ、これは蘭達が仕組んだ事ですので、次回はいったいどうなるのでしょうか？といった感じですね、ハイ。

では、またお会いしましょう！！

15話：愛する気持ち

「蘭、どお？いい感じになってるー？」

「あ、園子。しいー。今良いところなんだから、声聞こえたら大変でしょ。」

「ごめん、ごめん。」

「あのー、あの2人は何をしているんですか？」

「お子様は見ちゃダメ。ほら、もうすぐ部屋に突撃するから早く準備！！」

「えー。歩美も見たいよう。」

「俺だって見たいぞう。」

「みんな、静かに！！みんな、私達も行くから準備しよう。」

「はあい。」

歩美、光彦、元太が仕方なく答えた横で、コナンと哀は、暇そうに聞いている。

それから5分後。

みんなは、ケーキやお菓子、プレゼントなどを手に部屋の前に立っていた。

「みんな、いいー。私が、斉の！って言ったら、部屋に入るわよ。」

「うん！！」

「行くよ。……斉の！！！！」

ガチャ

パンパンパンーン

「おめでとうー！！！！」

みんなの声が一斉に響いた。

「え!?!」

和葉が驚いて素っ頓狂な声をあげた。

「和葉ちゃん。おめでとう。」

「和葉お姉さん、おめでとうございます。」

「ど、どういう事!?!」

「ごめんね、和葉ちゃん。服部君が帰ってくる事とかこのパーティーの事とか黙ってて。私達、和葉ちゃんをびっくりさせようと思つて。」

「つてことは、みんな知ってたん? 平次が帰ってくるって事。」

「うん。みーんな知ってたよ。」

「あたし、全く気づかへんかった。め、めっちゃびっくりや。へ、平次もこの事知っててん?」

「当たり前やんけ。お前をびっくりさせるためなんやから。」

「そ、そんなあゝ。あたしだけこんなに驚いてアホみたいやん。」

「お前は元々アホやんけ!?!」

「へ、平次ゝ!?! 平次のアホー!?!」

「わあ、すまんて。すまんすまん。」

そして、平次は急に真顔になった。

「なあ、和葉。じゃあ、俺が帰ってきたん、嫌やったか?」

「そんな、そんなわけあらへんやん。めっちゃめっちゃ、めえっちゃ嬉しいに決まってるやないの。」

「なら、ええやん。」

チュッ

「な、あ、へ、平次!?!」

「すきありやで、和葉。」

平次はそう言つて笑つた。

「そ、そんな…。それやったらお返しや。」

そう言うなり和葉は平次にキスした。ただし、さっき平次がしたのよりも、ずっとずっと長いキスを。

「や、やりおったな。」

「あんたが、先に言ったんや。文句は言わせへんで。」

「ちよつとちよつと、あんた達くく。」

急に園子の声がした。

「え!?!」

二人同時に反応した。

「あんた達が熱くいのは分かったけど、場所を考えてもらえる?よく周りを見てちょうだい!!」

園子にそう言われて慌てて周りを見渡すと、子供達が顔を真っ赤にして目を泳がせていたり、蘭が戸惑った顔でこっちを見ていたり、コナンと哀が呆れた顔であくびをしていたり…。

「あー!!!!」

「やあっと気づいていただけた?」

「あ、な、こ、これは…。」

「み、見んかった事にしてえ!!」

「そ、そんな事言われましても…。」

「こんなに目の前でされちゃ…、ねえ。」

「お、おう。…だぜ。」

たくさん時間がたっても二人の愛は変わらないようだ。二人の気持ちはばらばらになる心配はないだろう。

15話：愛する気持ち（後書き）

すみません、前話から平次と和葉チューしすぎですよ汗汗でも、これで多分平次と和葉は幸せになれると思うので、次話はまた時間飛びまして二人のその後を書いてみたいと思います。

ですが…。予め断っておきます。私は4月30日に吹奏楽部の定期演奏会というものを抱えていまして、今恐ろしいほど忙しいので、4月中の更新はもう不可能だと思います。。定演が終わったらまた更新出来るよう頑張りますね☆★

一応予告まで。後二〜三話で完結するようにします。

それでわ／／

16話：永遠（とわ）の幸せ（前書き）

話がまとまっていけど、一応最終話です。

16話：永遠（とわ）の幸せ

「平次、もう出かけるで。」

「わあ、とるわ。先に玄関出といてや。」

「分かったから、はようしてえな。…、あ、平次。昨日玄関掃除せえへんかったやろお!!」

「す、すまん。昨日はちょっとレポートが忙しゅうて…。」

「平次がレポート終わってないわけあらへんやろ。正直に言いや!!」

「…、うわあ! すまん! すまんて!! この通りや。」

平次は和葉の前で手を合わせた。

2人の会話で分かったかもしれないが、2人はまだ大学生で、そして、今は同棲している。

平次が留学から帰ってきて、大学に編入してきてから、最初は別々に住んでいたが、両方の親の策略などいろいろな理由によって、そのうち一緒に暮らす事になった。

とは言っても、もともとは幼馴染である2人な為、毎晩のように何かをする。と言った事はないから安心だろう。

「はあ。全く平次は…。一体これで何回目やと思ってるの! 料理全然出来ひんから掃除当番にしてあげてるのに。」

「つい…、忘れて寝てしもうてん。ほんと、本当に悪かったわ。この通りや。」

「本当に悪い思ってるんやろうなあ。まあええわ。あたしが昨日帰ってくるん遅かったんも悪いんやし。でも、もう忘れんといてな。あ、後、この落とし前は今日何かでつけてもらわんな。」

和葉はそう言って笑った。

「よっしゃ。じゃあ何か買_こうたるわ。何でも言いや。」

「せやな〜。そしたらいろいろ考えとくわ。ってあかん平次、急がな間にあわへんで。」

「ほんまや。和葉行くで。」

「うん!!」

今日は久しぶりに何もない休み。そこで、みんなを誘って大阪へ行くことにした。

もちろん2人にとっては久しぶりの帰省なわけで。。

そうこうしているうちに駅に着いた。

「よし、着いたで。」

「ありがとう、平次。」

「和葉ちゃん、服部君。おはよう。」

「おはよう、蘭ちゃん、コナン君。」

「おはようさん。」

「良かった、間に合って。なかなか来ないから大丈夫かなあって心配してたのよ。」

「ごめんなあ。平次が昨日掃除忘れてたせいで!!」

「間に合ったから全然平気よ。さあ、行きましょう。」

平次達は電車に乗った。

「あれ、そういや、くどツ：メガネのガキンチョはどこや？」

「僕ならここだよ。」

「あら、コナン君どこに行っていたの？もう少しで探しに行くところだったじゃない。」

「エヘヘ、ごめんなさい。喉渴いたからジュース買いに行ってたんだ。」

「それならいいけど。服部君もコナン君と話したいって言ってたのよ。」

「へえ、そうなんだ。僕も久しぶりに平次兄ちゃんといっぱい喋りたいな。」

心の中でさっき工藤と呼びかけた事を毒づきながら言った。

「相変わらず仲ええなあ。平次とコナン君。」

「あら、和葉ちゃんやきもち？」

「そんなっちゃうわ。ほんまに仲ええ思ただけやで。それに…それに、あ、あたしかて、平次との仲のよさやったら、ま、負けへんで。」

「か、和葉ちゃんって…。」

蘭はそう言って真っ赤になる和葉を見て、

「かわいいーい！！」

「ちょ、蘭ちゃん、止めてえな！！」

そして、そんな2人を見ている男が2人。

「和葉とあの姉ちゃん、やっぱり仲ええなあ。」

「なんだ、お前蘭にやきもちかよ。」

「アホ、そんなんちゃうわ。お前かて仲ええ思うやろ？」

「まあな。」

「ま、そんなん言うても、俺のほうが和葉と仲ええ思うで。」

「服部、お前…。」

コナンは普段の平次らしからぬ発言を聞いて、

「お前でもそんな事言うんだな。」

と、1人爆笑していた。

「おい、工藤。うるさいわ。自分黙ったとき。」

そして、そんな2人の笑い声が聞こえてきて…。

「あら？あの2人何の話してるのかしら？」

「ほんまや。めっちゃめっちゃ笑うてるやん。」

「コナン君、服部君。何話してるの？」

「あ、蘭ねえちゃん、和葉姉ちゃん、聞いて聞いて。平次兄ちゃんがね。」

「おいコラ、待てボウズ。そんな言わんかてええがな。」

「ちょ、平次！！何コナン君にひどい事言うてんの！コナン君かわいそうやんか。」

例によって和葉が止めにかかる。和葉のおかげでコナンは言いたい事を言う事が出来た。

「あのね、さっきまで蘭姉ちゃんと和葉姉ちゃんが喋ってたでしょ。平次兄ちゃんがね、仲良いねって言ってね、僕が和葉姉ちゃんが蘭姉ちゃんとばかり話してるからやきもちやいてるの？って聞いたら、自分の方が和葉と仲いいって言ってたよ。」

そう言って、和葉にっこりと微笑む。

もちろん、和葉はまた顔を赤くしているが、蘭は驚いていた。

「本当？すごいわね。私達も今同じような話をしていたのよ。」

「蘭ちゃん！言わんで！！」

「あら、別に良いじゃない。本当に一緒なんだから。」

蘭は和葉を無視して言い出した。

「あのね、和葉ちゃんもコナン君と服部君が仲良いねって言って、私がやきもち？って聞いたら、仲のよさだったら負けないって。」

蘭は平次に向かって言った。

「じゃあ、平次兄ちゃんと和葉姉ちゃんって、すごく仲がいいんだね。」

と、コナンはお互いの思いを聞いて顔を赤くしている2人をよそに、笑顔で言った。

「ええ、そうね。」

と、蘭も笑顔で答える。

「もう、蘭ちゃんとコナン君のアホー！！」

この場の恥ずかしさに耐えられなくなった和葉が叫んだ。

コナンと蘭はあははと笑う。

そうこうしている間に電車は大阪に着いた。

「あ、もう着くんちゃう？」

「ほんとだ。じゃあそろそろ荷物持とうか。」

「うん。」

「ねえ、平次兄ちゃんは？」

「あれ？ほんまやどこ行ったんやろ。まあすぐ戻ってくるやろ。」
ところが電車が大阪に着いてアナウンスが流れても平次が戻ってこない。

「平次まだ戻って来いへん。何しとるんやろか。あたしちよつと探してくるわ。蘭ちゃん達、先に降りというて。」

「え、でも。」

「大丈夫やて。すぐ行くから。」

「分かったわ。じゃあホームで待ってる。」

「うん。」

こうして蘭とコナンは2人で電車を降りた。

ホームで待つこと10分。やっと平次と和葉がやってきた。

なにやら2人で楽しそうに喋っている。おそらく、ここにコナンと蘭を待たせていることなど、すっかり忘れているのだろう。

コナンと蘭はくすりと笑って、

「服部君、和葉ちゃん！！早く早く！！」

その声によりやく2人を待たせていることに気づいて。。。

「ごめんなあ。平次のアホがなかなか見つからんかってん。」

「何言ってんねん。和葉がゆっくり歩くからやろ！！」

また2人の言い合いが始まってしまった。

「もう、2人が仲いいのはさっき分かったから。私達ずっと待ってたんだから早く行こう！！」

「そうだよそうだよ！！」

そう言うコナンと蘭を見て、平次と和葉はお互いの顔を見合わせて、そしてふっと吹きだした。

「せやな。はよう行こッ!! ほんまごめんな。」

「今日は俺が昼飯おごったるわ。大阪の事なら任しとき!!」

4人は楽しそうに喋りながら歩き出した。

今日はきつとみんなにとって楽しい1日となるだろう。

そして、これからもずっと。。。

特に、これからも、いや、これからこそが楽しみな2人にとっては。。。

服部平次と遠山和葉の幸せを心から願おう。

16話：永遠（とわ）の幸せ（後書き）

こんにちわ、ちいです。

皆様、ここまで「愛する気持ちは永遠に・・・」にお付き合い頂き、本当にありがとうございます。

当初の予定と大幅に狂ってしまい、しかも更新は不定期で、申し訳ない限りです。。。

平和のカップリングは大好きなので、また書きたいです。そのときは、今よりもまとまった小説に出来るよう、努力したいです。

ご意見、ご感想、評価をお待ちしています。

次の話を書いたときには、ぜひまた読んで頂きたいと思います。

でわ、またお会いしましょう！！

本当に、ありがとうございました。

B y ちい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1146b/>

愛する気持ちは永遠に...

2010年10月15日21時38分発行